

全日本実業団が 10 倍面白くなるコラム⑧

男子 100m&200mにリオ五輪代表 6 人がエントリー

まずは代表同士の勝負を楽しもう

文：寺田辰朗

社会的にも反響が大きかったリオ五輪男子 4×100mRの銀メダル。1走の山縣亮太（SEIKO）、2走の飯塚翔太（ミズノ）、4走のケンブリッジ飛鳥（ドーム）の3人が長居競技場に勇姿を見せる。3人だけではなく、200m代表の藤光謙司（ゼンリン）と高瀬慧（富士通）、4×400mR 1走の田村朋也も加えた6人が、全日本実業団男子短距離個人種目にエントリーした。

種目は100mに山縣、ケンブリッジ、高瀬、藤光の4人、200mには上記6人が揃う。コンディションもあることなので全員が出られるとは限らないが、代表同士の豪華対決が実現する。それが入場無料で見られるのだから、長居に足を運ばないのはもったいない。

リオ五輪代表以外にも有力選手は目白押し。6月の日本選手権で決勝に残った馬場友也（LALL）と九鬼巧（NTN）、以前の五輪&世界陸上代表だった高平慎士（富士通）や塚原直貴（富士通）、小林雄一（NTN）らも出場する。リオ五輪代表たちに果敢に挑戦する姿が見られるはずだ。

●山縣が 100mで五輪日本人最高

リオの個人種目で好成績を残したのは山縣だ。100m予選を 10 秒 20（-1.3）で突破すると（8組2着）、準決勝で 10 秒 05（+0.2）の自己新をマーク。2組5着で通過することはできなかったが、ロンドン五輪の 10 秒 07 に続き、2大会連続で五輪日本人最高タイムで走ってみせた（自己記録は今年6月の布勢スプリントで 10 秒 06 に更新していた）。

山縣は予選で生じた課題を、準決勝でしっかりと修正した。日頃の練習でもビデオを撮影して、修正作業を繰り返している。リオでもテレビ局から動画提供を受け、「予選は上体が早く起きて、トップスピードが手前に来ていた部分を修正した」という。その走りを曲走路スタートの、4×100mR 1走にも応用した。

ケンブリッジは 100m予選を 10 秒 13（-0.5）で4組2着通過。風の条件を考慮すれば自己記録の 10 秒 10（+0.7。5月の東日本実業団）と同じか、それ以上の走りと評価できた。だが準決勝では 10 秒 17（±0。3組7位）とタイムを落とした。「予選では良い走り



ができたのに、準決勝では硬さが出てしまった」と悔やむ。

ケンブリッジは本来、大舞台でもまったく緊張しない選手で、リレーではその特徴をいかんなく発揮した。特に決勝では、ウサイン・ボルト（ジャマイカ）の隣のレーンで普通なら硬くなるところを、「憧れであり、尊敬する選手と一緒に走ることができ、ワクワクしていた」という。

200mの飯塚は日本チーム内でも「絶好調だった」と言われるほどの状態で臨んだが、20秒49で予選を通過できなかった（3組4着）。それをリレーでは、しっかりと修正してみせた。

「200mは上手く走ろうという意識が強すぎて失敗しましたが、リレーは思い切り走ることができました」

その結果がアジア新記録での銀メダル。36秒60のタイムは国別では世界歴代3位である。世界記録はジャマイカで歴代2位がアメリカ。アメリカはリオ五輪でも全員が9秒85以内の自己記録を持つ選手を4人揃えたが、日本はそのアメリカに0.02秒先着したのである（アメリカは最終的にはオーバーゾーンで失格）。

加速のしやすいアンダーハンドバトンパスの完成度を高めたことが、勝因となった。ボルトが記者会見で「日本は3月からバトンパスの練習をやっているのか？」と驚いていたほどだ。だがバトンパスだけでは、世界歴代3位を出すことはできない。3人とも100mの9秒台選手、200mの19秒台選手たちに匹敵する走りをしたから、銀メダルを取ることができたのだ。

● 9秒台&19秒台も期待できるが…

リレーの走りを見れば個人種目の9秒台&19秒台がいつ出ても不思議ではないが、銀メダルメンバーは帰国後、関係各所への挨拶やイベント出演などで多忙な状況が続いている。五輪と同じコンディションに仕上げるのは難しいかもしれない。見る側も記録よりもまずは、五輪代表同士の戦いを楽しむスタンスがいいのではないか。

だが、全日本実業団が行われる長居競技場は、高速トラック（記録が出やすいトラック）として知られている。そしてどんなコンディションでも、“次”の試合で何らかの進歩をしたいと考えているのがアスリートである。

飯塚は「リレーの走りがすごく良かったので、その感覚を秋シーズンの200mに結びつけたい」と話す。山縣も「いつでも五輪の時みたいに良いスタートを切れるように、秋のレースで技術を確立させたいです。またトップスピードの値をさらに向上させたい」と狙いを語った。

そして多少コンディションが悪くても（選手自身のコンディションでも、気象条件など環境的なコンディションでも）、9秒台&19秒台を出すことができれば、その意味はとてつもなく大きい。日本記録更新が足踏みしている状況（100mの10秒00は1998年、200mの20秒03は2003年にされた）が変わり、今後は9秒台&19秒台を“壁”と感じな

くなるだろう。結果として、個人種目の決勝進出に大きく近づくはずだ。

最終的にはリレーを走ることにはなかったが、高瀬も本当に良い状態だった。7月の合宿中に行ったリレー練習では、高瀬が入ったメンバーの方がタイムが良かった。アクシデントに備え、最後まで一緒にアップを行い、レースに備えていたという。

土江寛裕コーチは「高瀬君の存在が大きかった。5×100m Rだったら金メダルを取れたかもしれない」と評価した。全日本実業団でも高瀬がリレーメンバー3人に勝つ可能性は十分あるし、9秒台&19秒台の可能性も同様にある。

レース展開に関していえば、代表たちの実力は伯仲しているが、得意とする局面は異なる。コラム③でも紹介したように前半型の山縣、高瀬に対し、飯塚、ケンブリッジ、藤光は後半型だ。山縣や高瀬を、飯塚らが追い上げる代表同士の争いは、間違いなく会場を盛り上げる。

後半型の3人も、状態が良ければ前半からスピードが上がる。200mで飯塚や藤光が直線に入る時点で先頭に並んでいれば、記録的なレベルも高くなるだろう。日本選手権200mの飯塚はその展開で、20秒11の日本歴代2位をマークした。

山縣はリオ五輪代表同士の争いについて、「手強い相手ですが、優勝を目指して頑張ります」と表明。飯塚は「応援してくださった方々に恩返しのため、皆さんを楽しませるパフォーマンスをしたい」と話す。

リオ五輪と形は変わるが、リオの走りを再現しようと、代表たちが長居に集う。